



いていた。友人同士語るときは英語を用い、家ではイタリア語、といったパターンは珍しくないという。小さな街ですら、各国料理の材料専門店が目につき、ひとたびお祭りとなれば、民族衣裳を可愛く着込んだ子供たちが街にあふれるのも、このことを象徴している。しかし、私にとって面白いのは、そういう多様性が、実は、人々がきわめて似通った生活方法をしているという基盤の上になり立っていることである。同じ用具を用い、同じスーパーマーケットで買い物をし、同じ型の車で同じ映画へ出かけるのは、ある意味で、きわめてカナダ的な要素と言えると思う。こうしたカナダ的生活基盤の上に、よくいわれるカナダの「モザイク文化」はそれぞれ父祖の文化を受けついで様々な細片が調和して、多民族の文化がひとつに融けあつた輝きを放射し、ひとつの模様を描き出すのだろう。

言葉は文化を支えるひとつの大きな柱である。英国圏で生まれ、育つてゆくカナダ人たちは、この面では大きな文化的基盤を共有することができる。カナダの

人口構成は英国系が約四割、三割強がフランス系、残り三割が他のヨーロッパ諸国とアジア系といわれるが、実際、フランス系住民を除けば、ほぼ全員が「英語国民」と言つて良い。

フランス系住民は、大半がケベックに住んでいるのだが、ケベックの人々は自らを誇りをこめてケベックワ―ケベック人―と呼び、カナダからの独立を標榜する州政権のもとにある。私には、ひとつの国の一部分が独立する、というのは、実感として信じられないのだが、それをケベックワの悲願と評する人もいれば、無謀だという人もいる。私にはどちらかが正しいか判断などできない。しかし、若い国カナダが、その文化のアイデンティティを求めて「モザイク模様」を完成させるためには、ケベック色の細片は絶対に必要なのではないか、という気がする。私は、ここで日系カナダ人の方々に忘れる訳にはゆかない。総人口二千三百万のうち、わずか四万人余。しかし、日系カナダ人はカナダ文化の一部であると同時に、日本人の心を持ちつつカナダ人の眼で日本を見つめる人々である。日本という国を外から見つめる視点を、私は数多くの日系カナダ人の方々に教えていただき、またカナダ人としてのカナダのとらえ方も、色々な形で私のカナダ観に大きな影響を与えてくれた。

カナダの町

「街には顔がある」と言った人がいる。そ

こに集まり、働き、暮らしている人々の生きざまが、心が街に反映されているのだという。

全般に、カナダの街は、こぎれいという印象が強い。カナダ旅行の途中立ち寄ったアメリカは、家の造りが素晴らしく豪華なものと、粗末なものの差が大きいように感じられたが、カナダの家々は、一様にあるレベルを保っているように見えた。しかし一軒として同じ家はない。全ての家が、持ち主の個性を表わすかのように入入れられている。

大きな街、小さな街。工業の街、商業の街。私は、カナダの東側三分の一、州でいえばオンタリオ、ケベック、更に大西洋岸のニュー・ブランズウィック、ブ

リンズ・エドワード・アイランド、ノバ・スコシアと、五州にまたがって兄の車で移動したのだが、広大な国土に点在する町々が、実に様々の顔を持っていることに気がついた。夏のカナダは休暇の季節である。その中でも、しかし活気に溢れた街と生活そのものがのんびり感じられる街がある。私にとっては、前者の代表はトロントだし、後者の代表はニュー・ブランズウィック州のセント・ジョンという街だった。

あらゆる肌の人間が、ちよつと気取つた表情で、少し忙しげに歩くトロント、街の中心の小さな公園で日なたぼっこをしている老人ばかり眼についたセント・ジョン。こういった大きな街が人種の集



撮影 L. ストースター

昨年の日加協会主催「日加関係五〇周年記念論文コンテスト」で入賞した内野栄子さんは、賞金と副賞（東京・モントリオール間の往復航空券）を利用して、八月から九月にかけてカナダ

一周旅行をしてきた、かつてカナダに留学し、内野さんのカナダ理解を深めてくれたお兄さんと一緒に、バンクーバーから「赤毛のアン」のプリンス・エドワード島までカナダを横断、「楽しい思い出をいっぱい作ってきました」という。

首都オタワでは、わざわざマッギガン外務大臣が会ってくれ、本を寄贈された（写真）。

内野さんと共に入賞した愛知県岡崎市連尺小学校の権田梅芳校長も六月にカナダを訪れた。連尺および前任校の同市美合小学校の子供たちが文通や作品交換などを通じて親交のあつたバンクーバーとウイニペグの小学校を中心に各地を訪問、トロントまで足をのばして帰国した。